

エレミヤ書29章10-14節 「幸いな約束」

1A 七十年の期間 10

2A 神に知られた計画 11

1B 平和

2B 将来と希望

3A 呼び、捜す者たち 12-14

本文

エレミヤ書 29 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 28 章まで来ています。午後礼拝で 29 章から 31 章の途中まで読みます。今朝は、29 章 10-14 節に取り組みます。

10 まことに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。11 わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。12 あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。13 もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。14 わたしはあなたがたに見つけられる。…主の御告げ。…わたしは、あなたがたの捕われ人を帰らせ、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。…主の御告げ。…わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。」

私たちは前回、預言者ハナヌヤとエレミヤが預言における対決をしたところを読みました。ハナヌヤは、エコヌヤ王や一部の人々がバビロンに捕え移されたことについて、二年の内に主がバビロンを打ちくだいてくださり、彼らはエルサレムに戻ってくることができると預言しました。けれども、エレミヤは、そのように主がしてくださるよう、とは言いましたが、神のご計画はそうではないことを知っていました。そして偽預言を行なったハナヌヤが、神に打たれることを宣言しましたが、果たして二カ月後にその通りになったことを読みました。

そして 29 章に入りますと、エレミヤはその捕え移された人々に対して、ゼデキヤ王の家来の手に託してバビロンに手紙を送りました。その内容の一部が、今読んだところです。偽預言は、エルサレムだけで聞くだけでなく、バビロンの地でも行なっていた者たちがいました。それで、彼らに惑わされないようにするためにも、エレミヤは神の言葉を手紙に書いて送ったのです。それら偽預言者たちは、彼らの境遇は悲惨なものであるという前提で、それは間もなく終わるのだ、バビロンを神は打ち碎かれるのだと、解放が切羽詰まったものであることを伝えていました。エレミヤは、「そうではない。あなたがたには、神は平安な計画を立てておられるのだ。あなたがたは、七十年後に

戻ってくる。だから、バビロンに根づいて暮らさない。あなたがたが求めるならば、わたしがここバビロンにいることを知るようになる。」と伝えたのです。彼らにとっては災いに思われたことも、そうではなく平安の計画であり、そして将来と希望を与えるための計画だ、ということでもあります。

11 節の、「**平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。**」という言葉は、とても有名ですね。ネットで「エレミヤ 29 章」で検索してみると、あるキリスト教系の大学の卒業生が、「大学の生活がとても辛かった。けれども、20 数年生きてきて、神様が私たちそれぞれに目的と計画を持っていてくれることが分かりました。」という証しをしているものが見つかりました。自分の願いによれば、それは神の御心ではないと感じるようなものかもしれません。ハナヌヤの偽預言のように、神がこの嫌な経験を取り去ってくださるのではないかと願います。けれども、その辛い生活の中にご目的があったのだと知ること、それが幸いなのだということですね。

1A 七十年の期間 10

では改めて本文を少しずつ見ていきましょう。10 節には、「**バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。**」とあります。偽預言が二年であったところ、神の心では七十年を定めていました。その長い期間を通して、主は捕囚の民を取り扱ってくださいます。私たち人間は、すぐに回答が得られ、解決が与えられることを願います。しかし、品性であるとか、内側から変える働きを神が行なわれる時は、長い期間をかけて行なわれます。ちょうどそれは、歯並びの矯正が長い期間かかるのと似ており、じっくりと正していくことで、実質的に変えられていくのです。

聖書にあるイスラエルの歴史には、そのような神の取り扱いがいくつも出てきます。イスラエルの民は 430 年の間、エジプトにいて、それからエジプトを出ていきました(出エジプト 12:40-41)。それは、ヤコブの家族が七十人しかいないところから、神が一つの民にすべく、彼らを増やし、強くするためでした。そしてイスラエルは、荒野において、その不信仰によって約束の地に入れず、40 年間の放浪することになります。しかしそれも、20 歳以上の者たちが死に絶え、新しい世代が約束の地に入るようにすることができるためでした。古い人が死に、新しい人にあって信仰によって、御霊によって歩むことを表していましたが、そのために 40 年間が必要でした。

時代は飛び、士師の時代の終わり、預言者サムエルが生まれてしばらくした時のことです。イスラエルの民がペリシテ人と戦う時に、最前線に神の箱を持って行きました。それで神が戦ってくださると思いきや、大敗し、それだけでなく神の箱も取られてしまいました。七カ月後に、神の箱はベテ・シエメシュに戻ってきましたが、なんと町の人々は神の箱の上にある、贖いの蓋を開けてしまったのです。それで 5 万人もが死んでしまったのです。そして箱はキルヤテ・エアリムの祭司の町のところ、アビナダブの家に安置されました。そして 20 年経ったのです。20 年経ってようやく、イスラエルの民は主を恋慕う心が与えられました。そして、神の箱が大事なのではなく、自分たちの間からバアルやアシュタロテの偶像を取り除くことが必要であることを悟り、それで主にのみ仕えること

を覚えました。すると、ペリシテ人が戦いに挑んだ時に、主が戦ってくださったのです。神の箱があるという事実ではなく、二心を一つにして、主に仕えることを知るまでに 20 年かかりました。このように、人を練り清められる時に時間がかかることがあります。

ここで、「わたしはあなたがたを顧み」と、主体が神ご自身になっていることに注目してください。自分の願っていること、また聞き触りのよい偽預言のような人の願いではなく、神ご自身の思いを選び取っていく必要があります。神は、七十年の間、彼らのことを決して忘れておられません。そしてその時が来たら、必ずご自分の思いを実行してくださいます。その間に具体的に何をしなければいけないかを、4 節から 7 節に書いてありますが、4 節には、「エルサレムからバビロンへわたしが引いて行かせた」と、神ご自身が彼らをバビロンに移されたことをはっきりさせています。捕囚の民として、その奴隷の身として生きていくのは実に不本意なことでしょう。けれども、神がそこに置いてくださったのです。そのことを認めながら生活します。先ほどの、大学生活が苦しかったけれども、その大学に導かれたのは、他でもない神ご自身だと受け入れることが第一歩であったように、です。

そして 5-6 節には、「家を建てて住みつき、畑を作って、その実を食べよ。妻をめとって、息子、娘を生み、あなたがたの息子には妻をめとり、娘には夫を与えて、息子、娘を産ませ、そこでふえよ。減ってはならない。」と命じています。偽預言に従えば、難民状態のままでいなさいということですが、バビロンで定着して生活を営みなさいと命じられています。これが神の召し、御心だったのです。コリント第一 7 章には、「おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになったときのままの状態です。(17 節)」とあります。多くの人が、「神の御心は何か、神が自分を何に召しておられるのか。」ということで悩みます。けれども、主は、「あなたへのわたしの願いは、あなたが今、していることだ。あなたは、あなたが今、していることを召しとしている。」と言われます。

そして 7 節に、「わたしがあなたがたを引いて行ったその町の繁栄を求め、そのために主に祈れ。その繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから。」とあります。彼らはバビロンという異教の地にいます。相変わらず、周囲の国々を制圧して、世界帝国を目論む横暴な国です。それでも、主は、「繁栄を求めて、そのために主に祈りなさい」と命じられるのです。その理由は、主がバビロンに繁栄を与えられることによって、自分たちにもその恩恵が来るからだということです。私たちが今、置かれているところは自分にとって好ましいところではないかもしれませんが、けれども、主はそこを祝福されます。なぜなら、あなた自身を神は愛しておられて、あなたを愛しておられるから、そこを祝福されるのです。祈る対象は、自分の職場かもしれません。私たち教会であれば、この日本語学校が繁栄するように祈ることができます。繁栄することは、神の御心です。なぜなら、私たちがいるからです。そして今日は、参院選です。ぜひ我が国の繁栄と平和のために祈りましょう。

このようにして、ユダヤ人は主の定められた七十年をバビロンで生きています。

2A 神に知られた計画 11

そして11節を再び読みましょう。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

主がご計画を持っておられます。ここの「計画」は、「考え」とか「思い」、「判断」とも訳せる言葉です。主は考えを持っておられて、あなたがたのためにそれを行なっておられます。主は、ご自分で何をしているか、よく知っておられる方です。私たちにとっては、何をしておられるのか分からないことが多々あります。けれども、主はその度に、「安心なさい、わたしは、わたしで何をしているか分かっているから。」と答えてくださいます。

まだイスラエルがエジプトにおいて、奴隷として苦しんでいた時に、主はモーセとアロンをパロのところに遣わされました。そして、モーセは、「わたしの民を出ていかせなさい。」という神の言葉を伝えました。ところがパロは、ますます心を頑なに、「そんなことを言うのは、彼らが怠けたいからだ。もっと働かせないといけない。」と言って、それで、煉瓦を作らせるだけでなく、その材料である藁をも集めさせるように強いました。モーセがパロのところに行ったから、このようにもっと労役が苦しくなったことを知ったイスラエル人は、モーセとアロンを責めたのです。それでモーセは、「主よ。なぜあなたはこの民に害をお与えになるのですか。(出エジプト 5:23)」と尋ねました。すると主は答えられました。「6:1 わたしがパロにしようとしていることは、今にあなたにわかる。すなわち強い手で、彼は彼らを出て行かせる。強い手で、彼はその国から彼らを追い出してしまおう。」今にあなたにわかる、と主は言われました。主は、このようにして、ご自分のしていることを分かっておられます。

1B 平和

そして、「わざわいではなくて、平安を与える計画」と言われます。主が自分に良いことを考えておられるように見えないでしょう。平安ではなく、災いを考えておられると感じることももっと強いと思います。第一に、彼らは家に住み、仕事を持ち、子どもを生むのですが、奴隷であることは変わりません。そして、彼らは先祖たちが犯した罪、また自分たちの罪によって、今、こんな目に遭っているのです。ですから、平安であることはできないと感じるでしょう。しかし、主は災いではないと言われるのです。甦られたイエス様が、弟子たちのいる所に現れて、「平安がありなさい。」と言われました。神の子どもたちには、神は災いではなく平安のみを考えておられます。

そしてその平安は、懲らしめの中で与えられることがあります。「ヘブル 12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」

懲らしめというと、それはどうしても平安をもたらすように思わないかもしれませんが、けれども第

一に、懲らしめとは罰を与えることとは違います。懲らしめは人を正すため、矯正するために行なうものであり、罰を受けないようにするため、罪から離れるために行なうものです。いわゆる躰です。子が、これらの愚かなことをしないようにするため、それから離れることができるように守るために行なうものです。そして第二に、懲らしめは、罪は赦しますが、その罪の結果というものはある程度、許容することによって行ないます。例えば、傷害罪で五年の懲役になったとします。自分は罪を神の前で悔い改め、イエス様を信じました。罪は神の前で赦され、もう無いものにしてくださいませ。けれども、その五年の懲役は残っています。

しかし、その後にはいつまでも残る平安が来ます。主の聖めにあずかっているのです、安定した霊が与えられ、平安の義の実を結ばせることができるのです。この訓練を受けていない魂は、いつも不安です。そして不安定です。自分がお仕置きされるのではないかという未熟さがあります。ちょうど、親に怒られるのが分かっているのに、それでも、いたずらするようなものです。神への信頼が未熟なのです。しかし、こうした訓練によって神に信頼することを知ります。そして、何かがあっても安定し、知恵をもって神に応答できるようになります。

2B 将来と希望

そして、「**あなたがたに将来と希望を与える**」とされています。将来における希望です。今は見ることはできなくても、その先にある希望を神は与えておられます。私たちは、今、何か良いものがないかと探しています。けれども、主は、いつも永続するものをお与えになりたいと願っておられます。先ほど引用したヘブル書 12 章でも、「**そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると**」と言っていました。今の楽しみではなく、とこしえの楽しみのために動くのです。

3A 呼び、捜す者たち 12-14

このような、将来と希望の計画を神は持っておられるのですが、そこで私たちがどのように応答するのか、それが 12-14 節に書いてありました。「**12 あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。13 もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。14a わたしはあなたがたに見つけられる。…主の御告げ。…**」そうです、将来の希望を見つめている時には、私たちは主を呼び求め、また心を尽くして捜すのです。棚ぼた式に、「あと 70 年後に来るのね。だったらそれまで待っていて、それから動けばいいよね。」というものではありません。主は、もうすでにバビロンにおられるのです。そして、その良きことのために、主は既に働いておられるのです。主がおられ、語っておられることを知るのには、主を呼び求め、捜し求めながら、将来の希望を見つめるのです。祈るのです。イエス様が言われました、「**マタイ 7:7-8 求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。**」

主は、弟子たちに三日目に甦ると言われました。そして、事実、三日目に甦られました。そして、マグダラのマリヤに現れてくださいましたが、マリヤは園の墓でイエス様を見て、墓の番人だと思ったのです。それで、「あの方を運んだのであれば、どこに置いたのかを教えてください。私が引き取りに行きます。」と言いました。イエス様は彼女に、「マリヤ。」と言われたのです。それで彼女はイエス様にしがみつきました。このように、イエス様がすぐそばにおられるのに、気づいていないということがあるのです。マリヤにとって、主がおられることは、「園の番人が、愛する主のご遺体を持って行ってしまった。」という解釈になったのです。最も喜ばしい知らせが、なぜか悲しい、苛立たしい知らせとして受けとめられませんでした。こうしたことが起こらないように、主の声を聞くために、私たちは、主を呼び求め、主を捜し求めなさいという命令に従います。

先日、教会でも多くの方が映画「復活」を鑑賞されたと思います。その映画にも上手に表れていましたが、聖書の記述通り、主は全ての人にご自身の復活を現わされた訳ではありません。唯一、不信者としてはローマ兵が目撃しましたが、その栄光の姿を見るや死人のように倒れてしまいました。ですから、見たけれども見ていないのです。唯一、弟子たちにだけご自身を示されました。つまり、主を求めている者たちのみが、復活を復活として認めることができるのです。私たちは、見たら認めることができると思うかもしれませんが、確かに、求める人が見れば認めることができます。けれども、求めている人は見ても認めることができません。

ですから、主の時を熱心に待ちましょう。そして既にその時のために主が働いておられることを知りましょう。主がもうおられるのです。その状況にしたのは、主ご自身なのです。今は、自分の望ましいところにいるかもしれませんが、むしろ、真逆のように、災いに見えるようなところにいるかもしれません。ぜひ、「災いではなく、平和の計画だ、将来と希望を与えるためのものだ」と信じるのです。主を呼び求めてください、主を捜してください、必ず見つけることができます。